

洋16-133

「栄光のランナー 1936ベルリン」

★★★

2016(平成28)年9月22日鑑賞くシネ・リーブル梅田>

監督：スティーヴン・ホプキンス
ジェシー・オーエンス（4つの金メダリスト）／ステファン・ジェームス
ラリー・スナイダー（大学のコーチ）／ジェイソン・サダイキス
デビッド・アルブリットン（アメリカの走り幅跳び選手）／イーライ・ゴリールース・ソロモン（オーエンスの婚約者）／シャニース・パンタン
レニ・リーフェンシュタール（ドイツの女性映画監督）／カリス・ファン・ハウテン
アベリー・プランデージ（IOC会長）／ジェレミー・アイアンズ
エレミア・マホニー（アメリカオリンピック委員会の委員長）／ウィリアム・ハート
カール・ルツ・ロング（ドイツの走り幅跳び選手）／デヴィッド・クロス
ヨーゼフ・ゲッベルス（ドイツの国民啓蒙・宣伝大臣）／バーナビー・メッシュエラート
ユーロス・ピーコック（オーエンスのライバル）／シャミア・アンダーソン
ハリー・E・ディヴィス（全米黒人地位向上協会の会長）／グリン・ターマン
2016年・アメリカ、ドイツ、カナダ映画・134分
配給／東北新社、STAR CHANNEL MOVIES

＜東京オリンピック開催は大丈夫？＞

2016年8月5日から8月21日まで開催されたブラジルのリオデジャネイロオリンピックで、日本は予想以上の成績を収めたが、来るべき2020年の東京オリンピックに向けての体制づくりは大丈夫？7月31日の東京都知事選挙で小池百合子氏が新たな知事に選ばれた後に発覚した東京都江東区の豊洲市場問題、すなわち、盛り土によって土壤汚染問題を解決するとしていたにもかかわらず、地下に巨大な空間がつくられていた問題はとても広がりをもたらす。その影響によって、築地から豊洲を通じて開通するはずの東京オリンピック向けの新しい道路の建設が遅れると、いかなる影響が・・・？

他方、北朝鮮の核開発問題は近時の相次ぐミサイル実験と核実験によって深刻度を増しているが、今や国連はもとより、中国もそれに対して打つ手がない状態になりつつある。こんなリスクな状態があと3年も続ければ、近い将来きっと何か悪いことが・・・。

ちなみに、1936年にはドイツでベルリンオリンピックが華々しく開催された。しかし、その3年前である1933年にはヒトラー率いるナチス党による一党独裁体制が実現し、同じ年には日本とドイツが国際連盟を脱退した。さらに1935年にはナチス・ドイツは「再軍備宣言」をしたから、世界各国はベルリンオリンピックのボイコットを真剣に検討せざるをえなくなった。しかし、もちろん「政治とスポーツは別」。建て前はあくまでそうだが、さて現実は？本音は？そんな80年前の状況と2016年の今の世界情勢とりわけ北朝鮮を巡る動向を対比してみると、3年後の東京オリンピック開催はホントに大丈夫？

＜「オリンピック映画」といえば・・・＞

オリンピック映画といえば、日本人なら誰でも市川崑監督の『東京オリンピック』（64年）を思い出す。しかし、それより前のオリンピック映画の代表は、何といっても1936年のベルリンオリンピックを記録した『民族の祭典 オリンピア第一部』（38年）と『美の祭典 オリンピア第二部』（38年）だ。両者はその編集や構成においてナチスの勢力を誇示しているため、記録映画の枠を超えて批判されるが、さて？

私はその映画の一部をニュース等で断片的に知っているだけで、全体を通して観ていないから何とも言えない。しかし、本作にも登場する、両作の女流監督であるレニ・リーフェンシュタール（カリス・ファン・ハウテン）はたしかにヒトラーのお気に入りらしいが、記録映画のつくり方については全権限を自分に集中させることにこだわり、それを実現させているかららしい。ちなみに、2008年の北京オリンピックの開会式をプロデュースしたのは張藝謀（チャン・イーモウ）監督だが、彼だって中国共産党から中国の国威発揚に大いに役立つような演出を厳命されていたはずだ。ちなみに、あなたはあの開会式のド派手さをどう評価？

他方、『東京オリンピック』は政治色は全然ないが、ウィキペディアによれば、そもそも筋書きなどはないはずのオリンピックのために、まず緻密な脚本を書き、これをもとに壮大なドラマである『東京オリンピック』を撮るという制作手法をとったらしい。また、日本を代表するカメラマンとして世界的にも名を知られた宮川一夫が主導した撮影にも、アスリートの心情の表現を重視した演出や、超望遠レンズをはじめとする複数のカメラを使った多角的な描写などを駆使し、従来の「記録映画」とは全く性質の異なる極めて芸術性の高い作品に仕上げたらしい。そのため、レニ・リーフェンシュタール監督の『民族の祭典 オリンピア第一部』、『美の祭典 オリンピア第二部』と同じように「芸術が記録か」という大論争を引き起こしている。ちなみに、完成披露試写の2日前（1965年3月8日）に行なわれた関係者のみの試写会で同作を観たオリンピック担当大臣の河野一郎は、「俺はちっともわからん」「記録性をまったく無視したひどい映画」とコメントし、「記録性を重視した映画をもう一本作る」とも述べたそうだ。そんなさまざまな波紋を広げながらも、膨大な予算をかけて製作された同作は興行的には大成功し、その観客動員数は事実上日本映画史上最多と言わされているらしい。

本作の鑑賞については、ベルリンオリンピックで4つの金メダルを獲得した本作の主人公ジェシー・オーエンス（ステファン・ジェームス）の走り方や記録だけではなく、そんな記録映画づくりの視点からもさまざまな問題点に注目したい。

＜名選手は名コーチあればこそ！本作でもそれを痛感！＞

東京オリンピックでは、当時の日紡貝塚の女子バレー・ボールチームを率いて、「東洋の魔女」の名を世界にとどろかせた「鬼の大松」こと大松博文監督の徹底したスパルタ式トレーニングが有名。また、リオオリンピックでは、女子シンクロナイズドスイミングで中国チームから日本チームに復帰した井村雅代コーチが、厳しい指導でデュエットとチームの両種目で日本初の銅メダルをもたらした。

他方、個人競技のボクシングでは、『ロッキー』シリーズで「イタリアの種馬」ことロッキーを指導するのは、小さなジムの経営者ミッキー。『あしたのジョー』でジョーこと矢吹丈を指導するのは、丹下拳闘クラブの丹下段平。また、亀田興毅・大毅・和毅の三兄弟のコーチ役は父親の亀田史郎氏だ。しかして、本作で貧しい家庭に生まれながらも中学時代から陸上選手として類稀な才能を發揮し、家族の期待を一身に背負ってオハイオ州立大学に進学したアフリカ系アメリカ人（アメリカ黒人）、ジェシー・オーエンス（ステファン・ジェームス）を指導するコーチは誰？

それは、大学内のオーエンスの走りを見て、その才能を見出しましたコーチのラリー・スナイダー（ジェイソン・サダイキス）だ。今のようなスポーツ選手の特別待遇入学などない当時、オーエンスのような貧乏学生にはアルバイトが不可欠だったが、バイトと学業さらに陸上の3つをこなしていくのは至難のワザだ。五木寛之の小説『青春の門』（69年）でも筑豊から早稲田大学に入学しボクシング部に入った伊吹信介は講師の石井忠雄コーチの元でボクシングの指導を受けたが、それはコーチの家への住み込みを伴う、コーチと一緒に生活だった。さすがにオハイオ州立大学では選手とコーチの間にそんな公私混同（？）はなかったが、スナイダーがオーエンスに課する膨大な練習量をこなすために、ほとんど仕事をしなくてもアルバイト代を得られるようにするなどの便宜をはかったそうだから、さすがだ。このように、選手とコーチが互いに理解を深め、強い絆で結ばれる中でのハードな練習によって、オーエンスは次第にスター選手へと上りつめていくことに。なるほど、本作でも名選手は名コーチあればこそ、と痛感！

＜参加すべき？それともボイコットすべき？その決断は？＞

本作導入部では、選手オーエンスとコーチ・スナイダーの一心同体となった練習の成果によって、オーエンスが大学陸上競技大会の一つビッグテン選手権において、45分間で世界新記録3つとタイ記録1つを樹立するという快挙を成し遂げるストーリーが描かれる。

これはスクリーンを観ているだけで単純にすごいなと思える展開だが、他方、人種差別の色彩を強める1936年のベルリンオリンピックに参加すべきか、それともボイコットすべきかを巡る、アメリカオリンピック委員会の委員長エレミア・マホニー（ウィリアム・ハート）との対決は、手に汗を握る展開となる。この原稿を書いている9月27日には全米で民主党の大統領候補ヒラリー・クリントンと共和党の大統領候補ナルド・トランプとのテレビ討論会が行われ、1億人が視聴するそうだが、ベルリンオリンピックに参加すべきかそれともボイコットすべきかを巡っては、きっとそれと同じくらいの激論が繰り返されたのだろう。

歴史上の事実としては参加になったことはわかっているが、それを巡る当時のアメリカの人たちの激論ぶりは興味深い。しかし、アメリカ合衆国の国としてのベルリンオリンピックへの参加が決まれば、代表に選出された選手たちは肅々とその決定にしたがって参加すればいいだけ。私はそれが当然と考えていたが・・・。

＜オーエンスはボイコットすべき？しかしそれでは・・・＞

本作が単にオーエンスの成功物語やオーエンスの記録映画になっていないのは、ベルリンオリンピックへの参加を巡るオーエンス自身の苦悩がしっかり描かれているからだ。アメリカの参加がアメリカオリンピック委員会の民主的な投票によって決まったにもかかわらず、黒人地位向上協会のハリー・E・ディヴィス会長（グリン・ターマン）は直接オーエンスに対して、ナチスの人種差別政策への抗議のため「有力な黒人選手であるオーエンスは出場しないでくれ」と申し入れてきたから、オーエンスは大変だ。苦悩の末、オーエンスはボイコットを決め、それをスナイダーに伝えたから、2人は激しい議論に。しかし、いくら白人のスナイダーが説得してもボイコットの決断は黒人のオーエンスが下したものだから議論が噛み合わないのは仕方がない。これでは、せっかくここまで頑張ってきた努力はすべて水の泡。また、せっかく出した3種目の世界新記録も宝の持ち腐れになってしまいそうだ。

そんなオーエンスに対して大きな影響を与えたのは、大学のライバルでオーエンスが恋人のルース・ソロモン（シャニース・パンタン）と愛人（？）を巡ってトラブルっていた時、漁夫の利を得るかのようにオーエンスに勝利していたユーロス・ピーコック（シャミア・アンダーソン）。怪我でオリンピックへの望みを絶たれているピーコックはオーエンスに対して、「ヒトラーの鼻を明かすんだ」「オリンピック出場こそが人種政策への抗議になるんだ」と訴え、両親や今は妻になっているルースもそれを支持したが、さてオーエンスの決断は・・・？

結局ゲッベルスのセコい対応はいずれも裏目となり、かえってオーエンスの偉業を際立たせることになったから皮肉なものだ。もうとも、本作ではゲッベルスのセコさに対して、女性映画監督レニ・リーフェンシュタールのカッコ良さが際立っているから、それには賛否両論があるかも・・・。

＜意外にセコいゲッベルス宣伝相！＞

今年5月には、JOC（日本オリンピック委員会）と東京五輪招致委員会がコンサル会社に2億2千万円を支払い、東京五輪の開催を「黒いカネ」で買った、という疑惑が浮上した。そこでフランスの警察当局は捜査本部を設置し捜査に乗り出しだが、コトの真相は今なお不明だ。このようにオリンピックとカネ・汚職という「汚れた構造」は今も昔も変わらないらしい。つまり、本作では後にIOC会長となるプランデージとゲッベルス宣伝相との戀着がチラリと描かれるのでそれにも注目したい。

プランデージはベルリンオリンピックへの参加について「政治とスポーツの分離」を唱えて「参加すべき」と主張していたが、それは100%本音だったの？それとも、ベルリンオリンピックへの参加を通じて自己の利権の拡大を狙っていたの？そこらあたりは微妙で、判断は個々人に委ねられているが、ナチスが唱えた「民族の祭典」、「美の祭典」がキレイ事なら、「政治とスポーツの分離」や「アマチュア精神の発揚はカネとは無関係」もキレイ事・・・？清濁合わせ飲むことが大切だと言ってしまうとまた問題だが、そこらあたりのさじ加減が難しい。オーエンスは単に選手としてトラック上で全力を尽くせばいいだけだが、それを取り巻くコーチや監督そしてオリンピック委員会等の組織の幹部たちは大変だ。

2020年の東京オリンピックでは、森喜朗会長を頂点とする日本の東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会に、オリンピックとカネ・汚職を巡る「汚れた構造」が露呈しないことを切に望みたい。

2016(平成28)年9月29日記